

どこにでも疑問を

筑波大学 名誉教授

台 利夫 (うてな としお)

最近の科学の発展は特定分野の細分化とともに学際的連携の成果による。したがって知覚の実験心理学者と学校臨床心理学者の討議や共同作業も必要だし可能でもあるが、容易には成り立たない。客観視しがたい心について共通の基盤を持ちにくくアプローチの仕方も違っているからである。ある分野でエキスパートになるほど他分野について関心が薄くなるけれど、所属する分野ではそれで済んでいる。そのために共通の本質的問題が触れられないままにならねばよいと思う。

たとえば、身体と心と環境の間については古来おびただしい数の理論が提示されている。この課題 — とくに景色や事象を前にしての生々しい知覚体験（いわゆるクオリア）と脳の神経生理活動の関連 — に哲学者は強い興味をもって繰り返し、むしろ論議している。そして近頃の科学哲学者の多くは心を飛び越えて身体と環境の間の直接的関連を語っている。他方、心理学者は心と身体と環境は当然相互作用し合うものという前提で、その在りようを掘り下げるよりも、おおむね心を概念化・記号化して生理の側さらには環境の側からの知見と相応じさせて研究してきた。

むろん哲学と心理学は立脚点が異なるから、それぞれが何を論じようとそれはそれでよい。だが心理学はまさに心を主題にする立場からあえて自らの前提を省み、心がいかにして／どのようにして身体や環境に関わるのかをあらためて考えてもよいのではないか。そこには了解と説明の間柄など厄介な課題が立ちだかるだろうけれど、それを解きほぐす努力がまた心理学諸分野の交流を促すことにもなるだろう。

上記の問題が心理学にとって重要かどうかはさておいて、重要なのは当然とみられてきた事柄 — それが過去の偉大な研究者によって明らかにされたもの — であっても疑問をもつ構えを失いたくないということである。これまで拠り所としてきた視点を離れ、自分の業績にもとらわれず、異なる角度から事態を見直す必要があるかもしれない。真理とされるものでも当代のパラダイムに沿ったものであるから常に変革の余地はある。そのことは観念ではわかっているも所与のものを慣習的に妥当としてしまいやすく、究明は後まわしになる。困難ではあるが一層の真実を求めて、どこにでも疑問を投げかける構えは常に保持したい。



Profile — 台 利夫

1927年生まれ。1952年、東京文理科大学心理学科卒業。専門は臨床心理学。著書は『心理療法にみる人間観：フロイト、モレノ、ロジャーズに学ぶ』（単著、誠信書房）、『参加観察の方法論：心理臨床の立場から』（単著、慶應義塾大学出版会）、『新訂 ロールプレイング』（単著、日本文化科学社）など。